

機関番号：12604

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21720091

研究課題名（和文） アメリカ前衛演劇における可塑的身体のリアリティ

研究課題名（英文） Plastic Bodies in the American Experimental Theater

研究代表者

小澤 英実（OZAWA EIMI）

東京学芸大学・教育学部・講師

研究者番号：00466913

研究成果の概要（和文）：

1960年代のアメリカ前衛演劇（ポストモダンダンス・パフォーマンスを含む）を資料の広汎な入手とその精読と分析、ならびに日本の小劇場演劇に対する現地調査とインタビューを行い、入手資料を分析した。2000年代日本の小劇場の演劇・パフォーマンスとの近似性を比較参照項として導入したことで、アメリカの60年代の前衛表現における身体物質性・日常性・市民性が、新たな民主主義演劇的主体の身体としての可能性をもつことをあきらかにしたほか、具体的な演劇実践に関わることで理論と実践の往還を試みた。

研究成果の概要（英文）：

In this project, I researched a wide range of material dealing with the 1960s US experimental theater (including postmodern dance and performance) and the contemporary Japanese regional theater. With close reading of these material, fieldwork and interviews, this project clarified that the characteristics of the bodies in the US experimental theater, such as materiality, “hereness”, and citizenship, have opened up the chance for theater to emerge democratic-theatrical bodies in which now recurs in the contemporary Japanese theater. These conclusions were reinforced by being questioned in practice as I involved myself with the specific theater productions.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総 計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：アメリカ文学・文化

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英米文学・身体論・パフォーマンス

1. 研究開始当初の背景

これまで研究代表者は、アメリカの北米の女性ゴシック小説からホラー映画をはじめとする大衆文化に対し、多様なテキストと現代社会の動的な相互関係を解析することを主

眼とした研究を行ってきた。その際、（1）ジュディス・バトラー、エリザベス・グロス、ダナ・ハラウェイら英米のフェミニストが展開した身体論を理論的立脚基盤とし、（2）テキストのなかで有徴化される身体がどのような効果を生成しているのかという二点

を立脚点としてきたが、研究を進めるにつれ、「身体がジェンダーや人種や階級的格差をとおしてどのようなプロセスで有徴化されるのか?」「言説化された身体がもつパフォーマンス的な行為性を、いかに理論化すべきか?」という問いを考察するには、とりわけ演劇における上演と戯曲の関係や、舞台上の身体の **performativity** を考察することが必須であると認識するにいたった。

現在の日本とアメリカにおける舞台芸術研究は、内野儀の概観によれば、美学と社会学に二分化された状況にあり、従来の演劇研究の異議申し立てとして発生したパフォーマンス研究においても、実証主義的な「記述のモデル構築」が主流となっている(内野儀『アメリカ演劇の現在』『知の劇場、演劇の知』、ペリかん社、2005年)。本研究は研究対象の美学的価値や社会的価値を評定するのではなく、演劇表現における身体のリアルティ／パフォーマンス性を理論化すること、ならびに、語りにおけるリアリズムを研究することを主眼とした。この観点からアメリカ演劇研究の動向をみたとき、身体の変容性やパフォーマンス性に焦点を宛てた演劇研究はいまだ開拓の余地がある。ラムゼイ・バートによる「エイリアンの身体」(Ramsey Burt, *Alien Bodies: Representations of Modernity, "Race," and Nation in Early Modern Dance*. New York: Routledge, 1998) や、東洋と西洋の身体的特異性から桜井圭介による「ゾンビ身体」という概念の提起があるが、(桜井圭介「コドモ身体ということ」『舞台芸術』、2005年)、こうした「異形の身体」の概念が、フィクションのなかで、いかなる＜リアルティ＞をパフォーマンスするのかを見極める必要性を感じたことが研究の背景にある。

2. 研究の目的

1. の背景を踏まえ、本研究の目的は、文学・文化作品を含めた「語り」と「リアルティ」の相関性を、演劇における戯曲の物語と生身の身体による上演の関係の考察からあきらかにすること、とりわけそれを 1960 年代のアメリカ前衛演劇と、日本の現代小劇場演劇との比較考察の手法からあきらかにしようとする点にあった。具体的には、

(1) 1960 年代のアメリカの前衛演劇と(ポストモダンダンスを含めた)パフォーマンスを、2000 年以降の日本の小劇場演劇を媒介にして分析し、両者の身体表現が志向する＜リアルティ＞の差異を考察すること。

(2) その結果から、人間の身体が代行＝表象する＜リアルティ＞を、現在の身体論ならびにアメリカ演劇研究の枠組みのなかで理

論化するとともに、(文学作品を含めた)「語り」におけるリアリズムの様態の分析に繋げることの二点を目的に掲げた。そこから、申請者の問題意識を、物質的な身体性が上演というフィクションの成立に必須の要素としてかわるアメリカ前衛演劇の分析によって発展させ、可塑的な身体から派生するパフォーマンス性を理論化することを目指した。

1960 年代のアメリカ前衛演劇運動は、マイケル・カービイの概観どおり、上演における戯曲の優位性を排し、「俳優の復権」「上演の復権」、「演劇的身体」ではない「日常的な身体」を舞台に乗せたが、「即興」「観客参加」「ハプニング」の手法による現実へのゲリラ的介入を特徴とする「リビング・シアター」「オープン・シアター」やトリシャ・ブラウンらジャドソン・チャーチ派のパフォーマンスにおける「即物的運動への回帰」といった 60 年代のアメリカ前衛芸術運動の特徴は、いまや日本の現代演劇における俳優の身体運用に極めて近接する様相を呈している。2000 年以降の日本の小劇場演劇のなかに、新劇に端を発する近代リアリズム演劇とも 1960 年代以降のアンガラ前衛演劇とも手を切った、新しい演劇形式が登場している。具体的には、1990 年代より「東京」というローカルな場所性と日本人の「リアル」な身体性の探究を始めた宮沢章夫、ブレヒトの演劇論と平田オリザの現代口語演劇を出発点に「超リアル口語演劇」と呼ばれる台詞とダンス的な身ぶりを特徴とするチェルフィッチュ、セミドキュメンタリーという手法で現実をハイパーリアルに転化するポツドールといった第三世代の小劇場演劇の実践上の特徴は(1) 90 年代以降の日本のサブカルチャーを土壌とし、(2) 日本人固有の身体性を強調し、(3) 日本語の特異性をいかした(翻訳不可能な)言語表現を行うという、「場所の局所性」に根ざした身体と言語によって上演のリアルティを獲得するという点がある。本研究は両者の「場所の局所性」、「日常の身体」に依拠するという類似性に着眼し、上演において生身の身体に担保される＜リアルティ＞がどのようなプロセスで「語り」に作用するのかを検証することを目的とした。

60 年代のアメリカ前衛演劇を考えるうえで、日本の小劇場演劇における方法論の類似性の比較考察を経由するという手法をとったのは、むしろ日本とアメリカの演劇の潮流に四十年のひらきがあると指摘するためではない。本研究の主眼は、両者の共通性が、ハンス＝ティース・レーマンの言う「ポストドラマ演劇」の要素としての「俳優の生身の身体が担うリアルティの変容」にあると位置

づけ、「俳優に仮託された日常の「リアル」な身体が、作品という虚構を通じて、いかなるリアリティを「再現=代行=表象」するのか？」という問いに対し、両者の歴史的・文化的・地政学的身体的差異の分析を通して答えを出すことを目指す点にあった（ハンス＝ティース・レーマン『ポストドラマ演劇』同学社、2002年）。

3. 研究の方法

研究期間となった二年間のうち、2009年度は、現在入手可能な1960年代のアメリカ前衛演劇資料のより広汎な入手とその分析、ならびに日本の小劇場演劇に対する現地調査、インタビューを含めた分析を中心的作業とした。前者については、パフォーマンス・スタディーズの集大成であるフィリップ・オースランダー編『パフォーマンス』三巻本（Philip Auslander (ed.), *Performance: A Critical Concept*. 3 vols. New York: Routledge, 2003）の精読と検討を行い、現在のパフォーマンス研究動向を確認した。日本現代演劇についての調査・分析としては、東京にてチェルフィッチュ、ポツドールらの上演と戯曲テキストを相互に吟味し、戯曲のテキストが上演として立ち上がる際に、身体がいかなるリアリティを表象するのかをあきらかにした。また、それに平行して、東京国際芸術祭静岡春の芸術祭といった国内外の主要なフェスティヴァル、アメリカにおける主要なリージョナル・シアターを調査し、同時代のアメリカ演劇の上演において日本の小劇場演劇と同様の問題意識が共有されているかにかんする確認や検討を行なった。2010年度は、フェミニズムを中心とする身体論およびパフォーマンス・ティヴィティ理論における近年の動向と成果を参照し、その枠組み内における本研究の位置づけと有効性を確認した。前年度と同様の方法論をとり、引き続き日米舞台芸術、フェミニズム理論、身体論に関連する資料のさらなる入手と分析を行った。具体的には、1960年代アメリカ前衛演劇に関する主たる対象として、「演劇革命」の中心を担った「オープン・シアター」と「リビング・シアター」、トリシャ・ブラウンらジャドソン・チャーチ派ダンス運動、ジョン・ケージとマース・カニングハムの活動に限定し、視聴覚資料による詳細な分析を行った。日本の現代小劇場演劇に関しては、チェルフィッチュを中心に、指輪ホテル、ニブロールの国外で評価を得ている劇団と、リアルとフィクションの境界を攪乱する手法が特殊なポツドールやシベリア少女鉄道といった劇団を対象にし、その上演成立にいたるプロセスを調査するフィールドワークを交えた分析を行った。その際の方法論として

「演出家と俳優自身とが、舞台上の身体をどのように制御し、その身体性が作品にいかなる影響を及ぼしているか」に焦点を絞ることに留意した。

これに並行して、英米の身体論と、パフォーマンス研究において身体の可塑性に焦点をあてた資料を通読し（「ポスト・ヒューマン」「動物性」をキーワードとするキャサリン・ヘイルズやリビット・水田堯らの資料を特に重点的に精読した）、本研究の分析の理論的基盤を確立するとともに、両分野において本研究がもたらすインパクトと位置づけを検討していく作業を行った。

4. 研究成果

研究期間の2年間のうち、2010年度上半期の半年間は勤務校の都合により、交換客員教員として北京に滞在することになったため研究計画の一部変更を余儀なくされた。英語文献の入手の困難から、Beijing Modern Dance Festivalを中心に中国政府により招聘された英米のダンス・カンパニーや、英米のポストモダンダンスを吸収し独自のものとして発展した中国のコンテンポラリー・ダンスと舞踊の現状を調査を行い、北京に滞在するパフォーマンス研究者との意見交換を行なった。この滞在では、結果的に日米の前衛演劇・パフォーマンスにおける身体制御を相対化する枠組みを得ることができ、本研究にとって大きな収穫と意義があった。

1960年代アメリカ前衛演劇（ポストモダンダンス・パフォーマンスを含む）運動と2000年代の日本の小劇場のパフォーマンス実践の近似性は、チェルフィッチュやマレビトの会、岡崎藝術座など具体的な作品を検証することで実証され、日本における演劇の展示主義的傾向や、サイト・スペシフィックな作品群の増加という特徴が、ジャドソン・チャーチ派のもたらした民主化と呼応するとともに、舞台上の身体を加工する新たな意識変容の現れであることを確認し、時代と場所を離れてこうした表現が偶発的に起こる社会的・文化的意味とは、グローバルな歴史状況に布置すべき問題であることをあきらかにした。また、日本小劇場演劇における身体運用の構造と変容の措定し、言語の意味を無効化する反復や、「退屈さ」に対する志向といったいくつかの共通性を認め、サンプリングやリミックス、レイヤー構造といったインターネットを中心とするマルチメディアを身体上にマウントする手法とそれに対する反動としての「物質」や「日常」への回帰を発見したことで、地域性・歴史性を帯びたローカルな現象としての身体が、グローバルな文化資本として翻訳されていく交渉のプロセ

ス、および物語やテキストのナラティブにおけるリアリズムの問題の密接に関連していることを、イヴォンヌ・レイナーをはじめとする日米の具体的作品を対比しつつ検証した。

もうひとつの研究成果としては、理論的考察と演劇実践との相互参照を行い、理論的分析を具体的な演劇実践との関わりと通して検証した点が挙げられる。2009 年度には2007 年より継続的に進化している長期プロジェクトである日米共同制作作品『DOE2.0』に翻訳者として関わり（〔その他〕③）、創作のプロセスや異文化交渉を参与調査したほか、フェスティバル・トーキョーおよび国際舞台芸術ミーティングにて日米のカンパニーやフェスティバルディレクターと日本のパフォーマンスにおける身体運用の特徴を討議し、欧米の演劇研究者とは同内容についての研究会を行なった。

2010 年度下半期は昨年度から継続している60 年代のアメリカ前衛芸術にかんする文献精読をコンテンポラリー・ダンスの文脈を中心に行なったほか、東京を拠点に活動するアーティストおよび制作者数名に対し、俳優の身体に対する意識について個別のインタビューを行なった。2010 年度上半期には、シェイクスピア『マクベス』におけるマクベス夫人にスポットをあて、女性身体と衣服とジェンダーの性役割の関係を問い直したミズノオト・カンパニーの作品『アンセックス・ミー・ヒア』にドラマトゥルグとして関わった（〔その他〕①）。本研究の成果は、この作品のなかに直接的に反映され、国内外の演劇研究者・ジャーナリスト・フェスティバル関係者からの有益なフィードバックや批評を受けたが、前述の理由から遅れている学術論文ないし口頭における成果発表にかんしては、現在早急に準備を進めている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4 件）

- ① 小澤 英実、書物は本物の血の夢を見るか——村上春樹とフィジカルなもの、ユリイカ、第42 巻第15 号、2011、pp. 192～196
- ② 小澤 英実、落下する身体と痕跡としての言葉——9.11 以前/以降の物語、アメリカ研究、査読有、第44 号、2010、P59—78
- ③ 小澤 英実、同期と非同期のあいだ——小劇場演劇の未来、舞台芸術、第15 号、2009、P220—230

- ④ 小澤 英実、「あなたは しにました」という体験について——無為の共同体リロード、ユリイカ、第41 巻4 号、2009、P176—183

〔図書〕（計2 件）

- ① 小澤 英実、新書館、幽霊学入門、2010、P106—119
- ② 小澤 英実、河出書房新社、村上春樹「1Q84」をどう読むか？、2009、P158—163
- ③ 小澤 英実、河出書房新社、尾崎翠、2009、P162—169
- ④ 小澤 英実、洋泉社、村上春樹全小説ガイドブック、2010、P174—175、P176—177、P181—182
- ⑤ OZAWA, Eimi, Palgrave McMillan, The Handbook of the Gothic. P305—306

〔その他〕演劇公演・翻訳

- ① 小澤 英実、『アンセックス・ミー・ヒア？』（ドラマトゥルグ・英語字幕監修）、国際舞台芸術ミーティングショーケース参加作品、横浜 BankART Studio NYK、2011
- ② 小澤 英実、「さまざまな劇」（ガートルード・スタイン著）、演劇研究基盤整備「舞台芸術文献の翻訳と公開プロジェクト」、<http://kyodo.enpaku.waseda.ac.jp/trans/modules/xoonips/detail.php?id=2010eng03>、2011、早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点
- ③ 小澤 英実、『雌鹿—DOE.2.0』（トリス・タ・ボールドウィン、羊屋白玉著）、日米共同制作戯曲プロジェクト、2009、森下スタジオ
- ④ 小澤 英実、『ヴァギナ・モノローグス』（イヴ・エンスラー著）サイン アート プロジェクトアジアン上演作品、2009、俳優座劇場

6. 研究組織

(1)研究代表者

小澤 英実 (OZAWA EIMI)
東京学芸大学・教育学部・講師
研究者番号：00466913